

鹿島茂著「クロワッサンとベレー帽 - ふらんす物語 - 」

文公文庫、中央公論新社 2007年10月25日刊を読む

宅配の新聞という名の友人

1. 15年ほど前、独りでパリにいて翻訳の仕事をしていた私は、降り続く雨で薄暗いアパルトマンの中に閉じこめられ、軽うつ状態に陥った。慣れない異国での生活ということもあったのかもしれない。だが最大の原因は、一日の時間がノッペラボーに続くことにあった。日本の生活にはあった何かが足りない。
2. そうだ、フランスには新聞の宅配制度がないのだ。だから、一日の区切りがなく、沈んだ気分を転換するすべもないのである。
3. フランスでは、第二次大戦後に宅配制度が崩れ、現在は、朝夕刊とも、わざわざ近くのキオスクまで買いに行かなければならない。これは、夏はまだしも、夜明けが遅い冬場はかなりつらい。こんなときには、日本の宅配制度のありがたさをつくづく感じる。
4. しかし、こんなフランスも、19世紀には、新聞宅配の先進国だったのである。とりわけ、第二帝政期に鉄道網が全国に張り巡らされてからは、始発列車で各駅の構内書店に届けられた新聞が、宅配業者の手で朝食前に予約購読者のポストに配達されるようになった。新聞が届くと、まず父親がこれを読み、ついで母親、最後は子供というように、一日の生活の中で、大衆は文字と触れあう時間を持つようになり、識字階層は飛躍的に拡大した。新聞を読むことは大衆の一つの習慣行動と化し、宅配制度は生活の一部に組み入れられた。
- 5.ところが、第二次大戦のナチス占領で鉄道が接収されると、全国的な大衆新聞の多くは、宅配の足を奪われ、廃刊に追いこまれた。占領から解放されても、宅配制度は元に戻らなかった。テレビの登場は宅配制度の衰退に拍車をかけた。こうして、フランスは宅配制度のない国になってしまったのである。
6. 宅配される新聞、それは、さほど親しくはないが、とにかく毎日欠かさず訪れてくれる友人のようなものである。こうした人は、いなくなってから初めてその存在の大きさがわかるものである。

P167 ~ 168

[コメント]

新聞を読んで自ら考える力、とりわけ批判的思考能力を身につけることが一人ひとりの生活にと

っても、また、社会の発展のためにも大切であるのに、家庭での購読を放棄している方が多いことは大問題である。朝刊だけではなく夕刊も家庭でしっかり読むことができることがいかに有難いか。この文章はよく教えてくれる。

- 2009年12月5日 林明夫記 -